こころの光

三宝の巻

前篇

自然……一
三宝……三
天尊……八
妙用……九
難思の光……一一
菩提心……一二
彌陀の光……一二
二乗……一四
一切知能……一四
如来の属性……一五
大円鏡智……一八
妙観察智……一九
自然界の知識……二〇
感応道交……二一
佛智……二一

後篇

如来蔵心体……二三
生産門縁起……二五
摂取門方便と目的……二六
二種機類……二九
依憑と冥合……三二

自然

自然とは自ら行者のはからひにあらずして、然らしむる、如來の性能に信順するが故に、佛智不思議のことわりは、自然法爾の理なり。楞嚴に清淨本然にして、自然に非ず、因縁に非ず、本然自爾の佛智に信順すれば、正定聚に位し、自然流入薩婆若海佛智の不思議に依屬すべし、自然法爾の道理。

聖道門にて自然法爾と云ふ事を無上佛と云ふ。法性自然、有佛無佛、性相常然、本來法爾の義、因縁造作を離れたる無爲法身の極談とす。浄土門にては佛智不思議に順ずれば自然に彌陀に契合する義なり。元照師彌陀經疏に念佛すれば二邊を超越して中道に從容す、念々彌陀の法身に契合し聲々流入薩婆若海。

彌陀の本願海は選擇攝取の大悲より法爾として一切衆生を成佛せしむること法爾の道理なり。

『自然とは本自爾のことにて、彌陀の誓の自爾にして行者の計ひにあらず、南無阿彌陀佛と依屬まば迎へんと計らはせ給ひたるによりて、行者のよからんともあしからんとも思はぬを自然とは申ぞと聞候。誓のやうは無上佛にならしめんと誓ひ給へるなり、無上佛と申すは形もなく在す。かたちも在まさぬ故自然とは申也。形在すとしめす時は無上涅槃とは申さず。形もましまさぬやうをしらしめんとてはじめに彌陀佛とぞ聞へ習いて候。彌陀佛は自然のやうをしらしめん料なり。この道理をこゝろ得つるのちには此自然のことは常にさたすべきにはあらざる也。常に自然をさたせば義なきを義とすと云ことはなを義のあるべし。これは佛智の不思議にてある也』と

無上佛とは形もなくますますとは自然の體なり。初のはたらきに南無阿彌陀佛とたのませ給ひて向へ給へるとは、南無とは阿彌陀佛とたすけ玉ひ（　）道理こそ信心にて、六字の外にはあるべからずとの義趣なれ。

無上佛とは無上涅槃の事にて無上菩提無上正覺とあり。無上自然佛を得る。

今曰く、自然は本覺眞神、清淨本然、阿彌陀の本體、永恒不變、自中存在、彌陀の誓とは卽意志全能にして、本體の勢力、終局目的なり。人は個人目的を犧牲にして眞理なる絶對眞理の終局目的に歸命信順すれば、實在的に解脱すべし。卽ち永恒不變の本體に歸入する也。

三寶

此三寶は宗教的關係の主體と客體との交渉にして、この三性が宗教心機に結合せる理によつて宗教的効果と實在の實現をなす。

佛寶とは客體にして、其本質は絶對精神、卽ち法界に周徧せる、一切の過失を離れたる純粹なる靈聖的本質にして、理性體、一切慧の心的光明にして、神聖正義恩寵等を屬性として、一切處に遍せる實在なり。其定相を表して盡十方無碍と名け、其永劫存在の活動を無量壽と名づく、絶對無限にして法界身、一切衆生心想中に實現すべ

き、個體衆生の精神の如くの蘊質なく、純粹なる至眞美の質にして、一切の處に周徧せる質體なれども、其本質は精神態なるを以て、其實在と直接に交渉せんと欲せば、觀念的に凝神し、心機能致一的に實現すべし。絶對無限なるを以て間接には感覺界も其一元より現じたるものなれば、萬物悉く此を離れて有ることなし。然れども所現の境界は其本質に非ず。其本質に接せんには觀經に說くが如し、如來是法界身、入一切衆生心想中、導師が

佛寶とは自性靈覺照了法界周徧の態なり。

次に法寶とは、疏に、法は軌にして聖道を生ずと。法は法然として法界に周徧するも直接には宗教主體と客體との關係に就て、主體の機能に關係して解脫靈化すべき契機にして、其本質は精神機能を止揚すべき契機にして、規則のあるあつて、此規律にして秩序を失はゞ主體と客體との交渉に佛知見を開示し、解脫し靈化する功果あるなし。例せば念彌陀三昧の中に、身口意三業、其軌持は口に聖名を、意に聖旨を念じ、身に（嚴）にし其恩寵を信仰す。軌持たる三昧門の如きは、彌陀の恩寵と信仰と心機能內面の交渉によつて、佛知見を開示し、心情には解脫し融合安立するなり。意志は靈化の意志とし、天然の主我を脫却し彌陀の聖旨實現として主我を脫して、彌陀眞我の中の生命として、法の波羅蜜門等は、彌陀の意志實現として實行行爲に道德秩序の中に行動するは軌持なり。苦諦十二因緣六度乃至八萬度門は悉く主體と客體との關係（よ）り、內外の實現として行動すべき軌則たり。

僧とは和合の義。主體が客體との交渉に就て秩序を失はず、軌則を正して、此客體なる彌陀の恩寵と軌則を以て關係的に、內面に佛知見を開示し融合安立の情操にして、彌陀の意志實現として、實行々動の主體なり。客體なる彌陀の恩寵を以て自己の意志として、生活々動するものにして、卽ち彌陀と和合融合安立せる志操をいふ。

往生論註に二種の法身あり。一者法性法身、二者方便法身、法性法身に由て方便法身を生じ方便法身に依て法性法身を出す。此二法身は異にして分つべからず、一にして同ずべからず。是故に廣略相入して統るに法の名を以てす。

無爲法身とは卽ち法性身也。法性寂滅の故に卽ち法身無相也。法身無相の故に卽ち能く相ならざるなし、是故に相好莊嚴卽是法身也と。法身は無知なり、故に卽能く知らざるなし。是故に一切種智は卽是眞實智慧也。

彌陀の本質性能は一切の處に存在せるも、人の信仰に交渉せざるよりは實現するに由なし。此本質は法身如來藏性の所造なり。個人は彌陀との交渉に實現べき脫却靈化の性能あるも、罪惡の素質の爲に覆はれて自ら之を開展して脫却すること能はず、彌陀の恩寵に緣るにあらざれば決して解脫して靈化し成佛すべきものにあらず、一切の客體と關係致一の主體は皆々和合なり。僧といふも、僧と云はば小乘佛敎の僧の團體のみを僧といふも、進化する佛敎に於ては、常住なる佛心と人の信仰との和合の義にして、たとひ剃髮染衣なるも其內面にして佛心と和合致一の狀態にあらざるよりは僧と名づくべからず。大乘には肉殼の形相によらず、精神の內容に僧俗を立つ。其和合の狀態は安心起行（　）に逃ぶべし。

法藏比丘は是彌陀と和合の義にして、之が開展して彌陀を現す義なり、觀音も楞嚴の說くが如く、上十方諸佛に奚し、下一切衆生に加す。是和合の義なり。すべて菩薩は覺有情、是表面は個體の人格にして其內容は彌陀致一の狀態なり。すべて僧の義なり。

慧遠、天臺、善導、曇鸞、永明等、我聖德太子、慈心、空也、法然上人、親鸞上人等は皆是彌陀の心と和合の標本たるものなり。

若し絶對無二の佛心が慈悲方便の權門より見ればモーゼ、キリスト、ボーロ、マホメット等は隨類應現の屬類なり。

天尊

天とは第一義天卽ち大自然の自性天眞、本來自爾造作の能する處にあらず。萬物と如來との區別は萬物は相待規定、如來は絶對無規定、相待規定とは因緣に約束せられ因果に繫がりて成生したる物にて、本來自爾なるものでない。故に因緣によりて成立し因緣によつて離し、故に生滅變化休むことない。如來の自性は絶對的にして因緣より成たものでなく、生滅變化もなく永恒自爾の存在である故に第一義天と云。宇宙萬物の自性にして本然淸淨の體性である。之を眞如の理と云ふ。然れども眞如の理と云はゞ何か凝乎たる若天的の客におもふもそは不活物となる。然らずして萬物の實體たると共に永恒常然の活動態である。故に絶對の大靈と名づく。物心の統一的存在にして唯物にもあらず。さればとて唯心にもあらず。大心靈態とす。

大靈は萬物の根源にして萬物に內存し乍ら而も超絶す。故に天尊と云ふ、法身としては天尊卽ち自體である。法身毘盧遮那、物心無礙の萬物內存の靈態。此法身の動く處秩序あり條理あり。天地萬物は悉く法身の天則に依て動かざるものなく、法の法位に住して世間の相は常住である。喩へば物理上の火は物を燒き水は潤し、水に火を加ふれば蒸氣力を發す如き、すべての物理上の理、また生理上の眼は視へ耳は聲を聞き鼻は香を嗅ぎ等の理等も悉く古今に通じて易らざる理の存在する所以。

故に法身より見れば萬物は法則のもとに條理が行はれてをる。天何も言ずして四時行はれ百物生ず。萬物何かは法身自性天の尊の命令の下に行はれざるものあらん。唯之を識得すると否にあるのみ。

報身は淨滿身なれば、法身が宇宙の體なれば報身は中心本尊なり。

妙用

天地に常恒建設の事業行はれ造化の妙用是法身天尊の如來の德の行業なり。天地法界に常に行はるゝ天地の妙用是法身天尊の妙用である。一大天尊から天地萬物は其命令の下に行はれぬ物はない。十界の依正三千の形相、不思議の妙用是悉く一大法身の現はれ、宇宙法界の常住の法則の故に法身と云ふ。

太陽を中心として八の惑星屬すと。是法身の分身なり、一切の無數の星宿悉く分身なり。一切の天體を統一攝理の一大法身の法則なり。

太陽は有限なれども一大法身を縮少せる分身なり。地球もまた一大法身の身なり。吾人はいかに小なるも一大法身を縮少せる分身なり。故に一大法身に具有する十界三千乃至宇宙間の有ゆる萬法は此縮少せる一身分上に其性を具有す。一切衆生に悉く天地法界十界三千の妙理悉く具有す。宇宙全一の五大の妙色と識大の心質とを此吾人の中に全宇宙の萬法を容る。

法の法位に住して萬法悉く法身の顯現ならざるはなし。經に一切の法性一切の法相有佛無佛常住にして異らず。又諸法眞實の相は相あることなし。生せず滅せず常にあらず斷にあらず、一にあらず異にあらずして而も一切の一の一切相と現ず。

難思の光

神は人の智慧と心理を以て量り得べきものなるべからず。淸淨歡喜智慧不斷光は唯神の觀念の心理に映現し來ることを自ら認識するのみにして神の自體は決して人智の知るべきに非ず。三賢十聖も測りえず。況や人智に於おや。之を證明するは往生及成佛して始めて實在的に契合して證明すべきのみ。

菩提心

菩提心は靈化の鞏固なる道德的志操にして、天然の幸福主義は願生の動機に非ず。主我幸福の爲を願生の動機とせば彌陀の願意に違ふ。自ら靈化しまた佗を靈化し、劣

神態を超脱し最高等に發達し神聖同化すべき意志を、靈化したる意志と名づく。自己靈化せば亦衆に及ぼす。順菩提門無染清淨心、幸福主義にあらず。

安清淨心、消極的に自己及一切衆生の苦毒と罪惡を脱して安寧ならしめんと欲望。樂清淨心、自己と一切衆生と同じく積極的に靈化の意志とし終局目的に解脱し靈化せしめて、畢竟の安寧を獲しめんと欲望す。積極的は精神的安寧にして眞聖の靈福なり。

彌陀の光

彌陀は絶對の光なるを以て、すべて人類が神的觀念を以て映じ來るものは、みな是廣義にて云はゞ、彌陀のひかりなり。其實在を識せず名詞にのみ彌陀を認むるものはそは彼が（說）にして、實在其ものには關するにあらず。

廣義以ていはゞキリストが渴仰憧憬せし神の靈光といふも、またマホメットが神の光と欽仰せしも、牟尼世尊が無量光と稱して歸敬讃嘆せしも、之を仰ぐ心機に於ては之を見る心眼に於て其明の度はいかゞに在りしやははかる處に非ざるも、この絶對なる容體に於ては別ならざるべし。

或は本體に本づき具存とし、其相に依り一神とし、其用により多神といふも、其實體に至つては異あることなかるべし。

唯進化の程度には、天然的に光を認とめ、超天然に光を意識する如きは、是まぬがれざる處なり。

二　乘

聲聞の見地に在てこの靈光を見上るものは皆一定したる方面を見る。同しき眞空無爲の體を見、羅漢證入の境、是なり。是等は牟尼の一定したる規定の下に演繹して其極度に到達せり。故に異途なし。其異途あらば其師がゆるさざる處なる故に。

緣覺に二種の內、緣覺は無師にして人生觀をつくりて自ら悟る。前の如し。

獨覺に種類甚多し。一の系統をつくりて研究する者あり。また飽まで獨斷的に研究する類あり。すべての哲學者は悉く此緣覺に攝すべし。彼らは唯世界觀人世觀唯衆生の心靈救濟を目的とせずして、唯原理を推理し研究す。學理として精修するが故に、宗教の見地より見れば絶對を活ける神とし光として此壽と光とに依て正く救靈せんとの活用に供せざるを以て獨覺とす。究理の拙巧の程度如何にかゝはらず、人類の心靈に及ぼす實利の上より宗教的見地より受けたる名なり。

ギリシャのソクラテスの如きは實行を主とし直接に此光を見出さしめ、彼の如くは利他の功大なるを以て菩薩に攝すべし。

一切知能

絶對的觀念は横空間を盡して、一時に能く一切を寫象すべく、過去より未來際を盡して一念に寫象すべく、三際當念を離れざるが故に、無量劫の過去常に當念の一念にあり。又識を離れたる智なるを以て意識的直觀の形式を脱して、直觀なり。現實は觀念に相當し、觀念は現實に相當し、此寫象は眞實直觀同時なるは一切智と稱し、內容の變轉は全然理性なるは一切慧と相當す。全內容を不斷に實現するの意志は卽一切能態なり。

如來の屬性

一切智一切慧一切能
如來は永恒存在
一切處遍在
至眞
至善

至美
全福
神聖
正義
恩寵

如來　眞理

（命令行爲には）……
　正義
　神聖
　恩寵

（感情には）……至美

（智力より觀ずれば）…至眞

（意志には）……至善

徧空間に
　靜—光—一切知
　動—明—一切慧

徧時間
　靜—靜—無限永恒
　動—命—無限活動

絶對
　（體）
　無限—自中存在
　　（空）—非空間、非時間、非物質
　　（有）—徧空間、徧時間、精神體
　（相）
　無邊
　　一切知—大圓鏡智
　　一切慧
　（用）
　無碍—一切能
　　神聖
　　正義
　　客觀的正義
　　主觀的正義

一六

（統一
　啓示—至眞
　恩寵
　　解脫—至美
　　靈化—至善

一七

大圓鏡智

宇宙には絶對觀念は一なれど主客二觀の二面（）
世の人は主觀客觀と見るものゝ實は絶對觀念のみにて
絶對觀外觀すれば物と見え內よりは又心とは見め
法界の一大觀念のかゞみには依正色心皆影像にして
物と云ひ心と云ふも二つなし一大觀念の內と外なり
まなこには此の大空も限りあり大自觀にはほとりなく見ゆ
感覺は環の裏より見ゆるなれ大自觀には表より見め

妙觀察智

宇宙大智光明界は一大心靈の上の依正色心の萬象なれば萬物の事々物々は體本一なれば體によりて相卽して不可離の關係あり。また事々物々各特殊的なれども、同一心靈の現はれたる萬物事々物々、力用によりて融合し交涉し相入無碍の關係をなすべき力用存せり。實に斯の相入交涉は微細に涉る時分複雜極りなきに至る。斯の不可思議なる法ありて佛と衆生と感應し、衆生に佛知見を開示し、如來の聖旨を啓示す。また衆生は佛の眞理に悟入することを得。近くは吾人日常に相互に言語を交し、意志を通じ智力を交換し、一人にして世界萬差の事理に通じ、天地の秘密を覺る如きは、是宇宙に斯の如きの作用を作すべき理性存すればなり。

自然界の方は人間の相互に言語を交し意志を交換し、すべての知識思考覺察判斷等

一八

一九

よりまた感情を相互に融合し戀愛し彼此の融合に發する知力感情の悟達解義（　）等は彼と此との關係上に起す精神作用、また進みては宇宙の秘密を發見する知力の如きは自然界に秘める眞理を一心に凝神する人の精神に神より啓示せられたるもの。

また進んでは心靈界の消息を吾人に傳ふ。即ち佛知見を啓示せられて、靈界の眞理を悟らして給はる如き相入の關係は實に無盡なり。

自然界の智識認識

自然界の森羅萬象悉く我らが智識の對象にして、
自然界に物心すべて相卽し相入してぞまじはりにける
宇宙間ありとあらゆる物として一つ海水の萬の波にて
先天の理性しあれば後天の見聞とにより認識はすれ
理性にはよろづはすべて（通）するも見聞よりは別々にして

感應同交

意識なき花のいろ香もいもとせのむつみてふ夜のひみつならずや
いもとせの秘め事なれど意識なき梅の花咲けば人目ひくかな
世のつねはかへりみもせず梅が枝花さく時は人もめづなり
いもとせの花咲きにほふ夕には人めを秘すとして人目さけゝる

佛智

法界體性智は佛智の本體にして其本質は絶對眞心にして徧空間時間の精神態にして個人精神の根底にして個人の根底にして觀念的本質を（　）し最深の觀念に相應せず。

起信に眞如の性は唯證のみあつて知るべしと。

鏡智は周徧せる一切慧相に衆生の觀念に寫象に相應せる智慧にして觀念的理（　）

に虛明靈通して大は周徧圓明の態、鏡に映現する如し。楞嚴に見の大の如し交徹靈通して性能あり。衆生寫象觀念の絶對觀念的性にして個人の觀念性大も法界に交徹靈明す。

性智は絶對理性

衆生は個人理性の根底、個人の最深根底は平等理性なることを衆生に知らしむ。

察智、啓示、全智、絶對佛知見、衆生の機能を開展して佛知見を與ふる慧態なり。

作智、絶對意志、全能、衆生の心情意志の關係的に解脱靈化の意志として聖靈道意として實行々動せしむる智力なり。

如來藏心體

實相論

本質—物心無碍一大心靈體
　　體—屬—寫象—一切智（相）
　　　　性—意志—一切能（用）

體量
　形式—非空間非時間絶對永恒同時態十方三世ノ一本體
　內容—眞如如來藏性無盡性德如々本空

體具—內容（二面）
　空—如來藏性本空
　不空—如來藏無盡性德

體義
　獨尊—一切萬法の根底
　統攝—一切萬法の中心
　歸趣—一切萬法の終局

三性分別

- 神性—如來性
  - 絶對無規定
  - 本然自性
  - 圓成實性—大我
- 世界性
  - 相待規定—形式
    - 時間
    - 空間—依他起性—中我
  - 因緣性又因果性
- 衆生性
  - 動植物有機物因緣成ノ上ニナル生物—偏計所執性—小我
  - 法性法身—本有自性身
- 二身
  - 方便方身
    - 三身
    - 四法身
    - 十佛身等

二界
- 自然界—衆生界—生死界—染法界
- 心靈界—佛界—涅槃界—淨法界

生産門　緣起

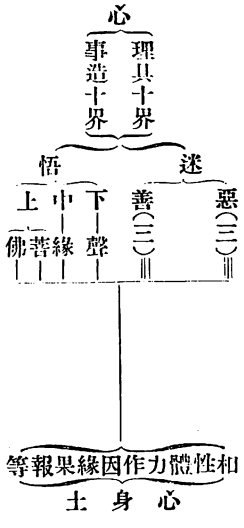
絶對神性一大心靈、一切智と一切能との屬性ありて、常恒の遍動力より發展して一面の世界性と現象す、形式には十方三世の空間時間は現はれ、相待規定卽ち空間的には因緣を以て相互に規定し、時間的因と果との連絡を以て萬物を發展す。因緣より所生の法、卽、第三衆生性とす

如來藏心
- 一切知—秩序の法則の原則
- 一切能—生産遍動の原力

によりて第二の世界性—時間空間の形式と因緣因果の規定を以て衆生性を發展す

衆生性—一切有機動植物因緣因果に規定せられて無量の部類—科—種類—性質あり各特殊性を爲す

天臺は如來藏心の分子衆生心性に



攝取門　方便と目的

如來藏心より世界性を發展し因緣律に依りて天地、太陽より地球を發展し地體進化して極小生物を發生し、極小生物因緣因果の關係を以て無數の階級に進化し、高等動物より人類に向上し原始の蠻族より文明民と進化す抑進化は方便にして終局目的は內的生活の精神を向上せしめて本具の靈性を開發し終局の眞理に歸趣せしむるにあり。之を攝取門とす。

卽ち法身より生じたるものを本源の法身に歸せしむるにあり。經に一切衆生法身從り生じて法身に還らざるなしと。

如來心
- 心靈界
- みおや

衆生心
- 子
- 自然界

如來心は父にして衆生心は分子なり如來心が衆生心を攝取する理法性能を抽象的に云はゞ

法身體大—本源に到らしむ。衆生心の根底は一大法身體。本體と原則。小我を本源の大我に體通する法則

般若(相大)。有佛無佛性相常然として法界に衆生を開悟せしむる心の光明が遍照す。

之を般若の相大、處として照さゞるなし、此智慧の光明衆生心を悟て絶對に悟入せしむるなり。

解脱(用大)。法界遍動の一大靈力が衆生心の煩惱惡質を解脱して靈態を明し如來の聖德と同うして又如來聖意を實行する事を得る力を能ふるなり小我解脱すれば大我自由の意と力(なり)

具體的に云へば

一大法身より方便法身を發現し方便法身に攝取せられて法性法身の本源に還らしむ。

法藏因位本願より、果成正覺無量光無量壽、光明を以て普く十方世界を照し念佛衆生を攝取す。

報佛は靈界の日光。常恒に衆生の心靈を照臨し、般若解脱の光と用とを爲す。應身は自然界に人身を以て衆生に敎ふるに報佛の本願を以てす。衆生攝化せらるれば涅槃靈界に歸り正覺を成す之を攝取とす。

二　種　機　類

世界依屬。自力

自とは天然主我的自己。力とは功力、自己の功力をもとゝす。側ら他力を仰ぐ。

全宇宙最深の玄義を知らず。現象世界因果の規定を中心とし罪福因果律を信じ絶對眞理の終局目的あるを信了せず。故に自己を絶對に依屬して法然自爾の大道に順せず

絶對依屬。他力。

他とは主我的自己に對す。絶對眞心の彌陀の終局目的に、彌陀の智力に依屬して、最深玄理に順ずるもの。

彌陀の玄義とは絶對界全宇宙最深の玄義なり。世界觀人生觀の根據にして、古來幾多の哲學者の頭腦を煩はしたる玄理にして、此世界觀に或は器械的に物質の流動力と見、或は唯心の一元理の本質勢力なりと。或は不識精神態なりと。

彌陀敎義の玄義も世界人生觀の最終の基礎より研究するに非ざれば其玄理を論り其秘密の蘊奥を究むること能はず。佛敎哲學に於ては、古來俱舍の物心二元論、誰識の唯心一元論、天臺の中道的唯心等、其論漸次に發達せり。圭峰の原人論の如は甚だ簡なりと雖ども原人の進化說の一班を識るに便なり。彼に依れば世界及人生の最終基礎は、或は大道元氣大極等の支那儒敎道敎は天然界を基礎として、超天然に宇宙の玄理を究めざるが故に、本より全宙の本體及性能を究たるものに非ず。佛敎に入て原始佛敎には世界及び人類は衆の羯磨を本とす。世界は衆生の同共業力の所感、個人は個人特殊の業力の所感なりと。業力を基礎として其本質を論せず。體なくして誰か業を有つと。次に進て法相には藏識以て根本とす。全宙は藏識の所現、根身器界は藏識によつて現ず。藏識が見分を精神とし相分は物質界とし自證分は精神の內面とす。藏識は有漏の根底にして眞如の薰習に依れば轉じて三身四智等と轉化す。賴耶を根本とす。

空宗には眞性本空、現界は悉く迷妄なりと。迷妄盡る時眞性顯示す。宗敎の要は唯幻妄を破すにあり。妄滅れば眞自ら顯はる。眞性消極的。

圓宗には本覺眞心、本自不生不滅、不增不減、常住不變の佛性を根底とす。本覺眞心は自性天眞修を假らず、迷亡する時は本覺現前すと。衆生本來成佛自ら識らざるのみと。此理を覺悟するとき卽成佛、初發心時便成正覺、所有慧心依佗不覺等。

今彌陀宗の玄義は一佛圓乘の敎義にして、客體の本質性能を論ずるときは一佛乘の四敎を以て最高圓滿、古來時間的に因果の二(位)を以て宗敎關係を說明せり、今は橫超的宗敎、空間的に客體との兩方面に就て研究せん。實を剋して論すれば圓滿なる宗敎客體は時間空間を以て主體と客體との區別をなすも、圓滿に其眞義を說明する能はず。

然れども相待的因果的の世界的方面の人には相待的因果的に說明せざれば其理を說明する能はざるの止むを得ざるによりてなり。

今は客體と主體との兩方面として客體は能攝所歸、彌陀にして、主體は世界的所攝な

り。

依憑と冥合

信頼依憑

○——○

一、罪惡深重

二、恩寵攝受

本來佛性を談せず、形而上を論せず、

認識冥合

○○○

一、佛性の本覺あり

二、煩惱覆深

三、始本冥合

昭和六年六月二十五日印刷
同　六月二十八日發行

誌代年貳圓（郵税共）

編輯兼發行人　山崎辨成

東京市小石川區小日向臺町三丁目
印刷人　春山治部左衛門

東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番